

Jane Austen の自然描写と

カントリーハウス

野村ヒサ

イギリスの詩人 Ben Jonson (1572~1637) は *To Penshurst* とする詩を書いて、Sir Philip Sidney のカントリーハウスを賛美し

た。102行から成るその詩の冒頭の24行を引用してみよう。

THOU ART not, Penshurst, built to envious show,
Of touch, or marble; nor canst boast a row
Of polish'd pillars, or a roof of gold:
Thou hast no lantern, whereof tales are told;
Or stair, or courts; but stand'st an ancient pile,
And these grudg'd at, art reverenc'd the while.
Thou joy'st in better marks, of soil, of air,
Of wood, of water: therein thou art fair.
Thou hast thy walks for health, as well as sport:
Thy Mount, to which the Dryads do resort,
Where Pan, and Bacchus their high feasts have made,
Beneath the broad beech, and the chestnut shade;
That taller tree, which of a nut was set,
At his great birth, where all the Muses met.
There, in the writhed bark, are cut the names
Of many a Sylvane, taken with his flames.
And thence, the ruddy Satyrs oft provoke
The lighter Fauns, to reach thy lady's oak.
Thy copse, too, nam'd of Gamage, thou hast there,
That never fails to serve thee season'd deer,
When thou would'st feast, of exercise thy friends.
The lower land, that to the river bends,
Thy sheep, thy bullocks, kine, and calves do feed:
The middle ground thy mares, and horses breed.

カントリーハウスの歴史は、はるか遠く、ローマの元老たちが市の郊外に建てて住んだ Villa まで逆ることが出来る。Seneca

(BC7~AD65)によれば原始農民たちは夜も露天に寝て安全であったとのことであるが、Varro(116?~27?B.C.)によればBC1世紀に

はすでに裕福な人々がぜいたくな dining hallを人に見せるために建てた。またその1世紀あとには、カントリーハウス(Villa Urbana)つまり古代ローマの荘園が stone houseやworking farmと、はっきり区別されるようになっていたと云われている。典型的なローマ紳士は郊外の邸宅(Villa urbana)から『通勤』していたのである。

Robert Castellが1728年に英訳出版した Pliny(Plinius) (23~79)の *The Villas of the Ancients Illustrated*の中のRoman villaの描写に次のようなものがある。

... via an oval colonnade, through a third area 'small but pleasant', there is a direct line of approach to the hub of the whole design, the seat of the master in his principal dining room. Looking out from there, the visitor perceived on the one hand the sea, on the other a vista back through the approach to 'the Woods and distant Mountains'...

以上はLaurentine houseというローマ郊外のVillaの描写であるが、さらにTuscan villaというTiber河を150マイル逆ったところにあるカントリーハウスの描写は

Imagine to yourself a vast amphitheatre, which only the hand of Nature herself could form: being a wide extended plain surrounded with mountains; whose tops are covered with lofty ancient woods; which give opportunity to frequent and various sorts of hunting. From thence the under-woods descend with the mountains: intermixt with these are small hills, of a stroug fat soil... which for

fruitfulness do not yield to the most level fields... Under these hills the vineyards extend themselves on every side, and together form one long spacious view: their extremities and bottoms, are bounded as it were by a border of shrubs: below these are meadows and fields... The meadows are flowery and budding, producing the Trefoil, and other herbs, fresh and as it were always springing; as being nourished by ever-flowing rivulets... whatever water [the land] receives, and does not imbibe, it throws into the Tiber.

(1728 end, 80-1)

規模の桁違いの大きさに言葉もない。グランド・ツアーでイタリーへ来たイギリスの紳士階級の人々は、周囲の田園風景とじっくり調和した広大なカントリーハウスの眺めを楽しみ、自分たちの屋敷の建築の参考にしたことは想像に難くない。Plinyの英訳といったガイドブックが出来たこと自体が、カントリーハウスの所有者に自分の家屋敷を権勢の表現の材料にしようという意図が生まれたことを示しているとも言えよう。

イギリス文学には庭園(カントリーハウスの庭)についての記述が多い。Shakespeareのヒロインたちは園亭で恋の罠に落ちることがしばしばあるし、Jane Austenのヒロインたちは、灌木のなかで恋をうちあけられたりする。田園地帯の散歩は当時の流行だったようである。

'country house'という語には

1. イギリス貴族の領地の本邸
2. 地方の大地主の屋敷

という意味があり、OEDによればその初出年代は1592年となっている。カントリーハウスを詠んだ詩の流れは Alexander Pope

(1688~1744), Maria Edgeworth (1767~1849) さらに Anthony Trollope (1815~82)と続いていく。また散文においても Henry Fielding (1707~54), Samuel Richardson (1689~1761) などの小説の背景としても、カントリーハウスは重要な役割を果たすようになる。そしてその流れの正統な後継者と目されるのが、Jane Austen (1775~1817)である。6篇の小説はどれもカントリーハウスの内外が背景になっている。Austenの時代まではピクチャレスクな風景をもてはやす態度が流行していて、その理論はAustenの作品にしばしば描かれる感情の葛藤の背景となっている。Austenは流行の行き過ぎを冷静で皮肉な目で見ている。

*Sense and Sensibility*のヒロイン、メアリアンは感じやすい性格のためにいろいろと苦しむことになる。倒れた並木を見ても泣き出してしまうような多感な女性であるが、そのメアリアンでさえ「風景のほめ言葉はわけのわからない符牒のようなもの」と認めている。エドワード・フェラーズはメアリアンと風景について次のように話し合う。

あまりあれこれ聞かないでほしい、メアリアン。い、かい、ぼくはピクチャレスクについて何も知らないんだ。ぼくが何も知らなくて無粋なのできみは気分を悪くするかもしれない。・・・ぼくは山が「急だ」と言うが、ほんとうは「険しい」と言わなければいけないだろう。また不規則でこぼこだと言ふべきところを、ぼくは表面が変っていて荒削りだと言う。遠くて見えないものも、あたり一面うっすらともやがかってぼんやりとしていると言ふべきなのだろうが・・・きみはぼくが正直に言えるようなほめ言葉で我慢しなきゃならない。たしかにこゝはすばらしいところだ。山は急で、森には良い立ち木がいっぱいある。

それに谷間は気持ちよさそうだ。ゆたかな牧草地にこぎれいな農家が数軒・・・まさにぼくの考えているすばらしい土地にぴったりだ。美と効用が結びついている・・・。(奥原・丹羽訳)

*Northanger Abbey*ではかなり頭脳明晰なヘンリー・ティルニーが、何も知らない(ゴシック小説に夢中になっている)キャサリンにいろいろなことを教える役柄になっている。

良い眺めというものはもう高い山のとっぺんから見られるものではないようです。それに晴れ上がった青い空がよい日の証拠にはならないらしい。

そしてヘンリーは前景、遠景、中景の話をし、側景、遠近法、光と影などについても説明する。キャサリンは「良い生徒」ぶりを発揮する。

*Mansfield Park*のヒロイン、ファニー・プライスは感受性豊かで、星の輝く夜に感動し、ラッシュワース氏のサザトンの土地にふりかゝりそうになる(当時流行の)庭園改造の波に心を痛める。そして「倒れた並木よ、ふたたび私はおまえの報われることのない運命を悼む。」とクーパーの一節を引用している。

*Persuasion*のアン・エリオットは分別と感受性の両方を持った(Austenの作品中もっとも年上の)ヒロインである。アンの行動は常に抑制のきいたものなのであるが、自然の美しさにも心から感動する。

アンの目的は誰の邪魔にもならないことであつた・・・散歩の楽しみは運動や昼の明るさから湧いて来なければならぬ。黄褐色に染まった木の葉やしおれかゝった生け垣に年の名残りのほほえみが、注がれる様子を目にしたり、秋を歌ったたくさん

の詩のいくつかを口ずさむことからわいて来なければならぬ。秋は風流や優しさをもつ人には特別の、つきることのない影響を及ぼし、読むに値する詩人なら、何かを書いて自分の感情を詩に託してみようという気になる季節である。

Austenはこゝで風景というものが人の心に訴える魅力や文学的な魅力を自分自身で意識していたことを示している。

*Pride and Prejudice*のエリザベス・ベネットは叔母の提案を受け入れて

まあ叔母さま、たのしそうですね。うれしいわ。これでまた元気をとりもどせます。失望や憂うつもお別れね。岩や山を前にすれば人間なんてちっぽけなものです。そこへ行くまでの時間も楽しそうですね。でも帰って来た時、他の旅行者のように何もはつきりと思いつけないなんてことのないようにしましょう。湖、山、河が想像の中で混乱するようなことがあってはいけません。またどこかの風景のことを話す時に、その場所がどこだったかについてあれこれ言い争ったりすることのないように……」

結局エリザベスは湖水地方には行かずにペンバリー(ヒーローの広大なカントリーハウス)へ出かけることになる。そこで彼女の繊細なものの捉え方からエリザベスが将来カントリーハウスのりっぱな女主人になるであろうということが読者にはわかる。(この事についてはあとでまた述べる。)「Austenの描く風景は、ふさわしい要素がふさわしい秩序で整理されている絵画として構成されている」とMargaret Drabbleは述べているが、*Persuasion*のライムの描写がまさにそれを証明している。

建物自体は何もほめるところがないが、よそから来た人の目をひくのは、すばらしい町の立地であり、あたふたと走るように海へつづく大通り、きもちのよい小さな湾、そこはシーズンになると移動更衣車で賑わうのだが、その湾をとりまくように突堤へ続く遊歩道、それに昔からのすばらしさを残して新たに改良されたところもある突堤、町の東にむかってまっすぐにのびている見事な断崖などである。ライムの周辺を見てすぐにその魅力に気づいてもっと知りたいと思わない者はよほど変ったよそ者に違いない。付近の景観、高台に広大に広がるチャーマス、さらにきれいに引っ込んだ湾。背後に黒い断崖を背負い、砂浜の低い岩のかけらが、潮の流れを眺めたり、座って倦むことなく物思いにふけるのにちょうど良い場所になっている。またアップライムの明るい村は対照的に森林が多く、とくにピニーはロマンティックな岩の間に緑が見え、点在する森の木や勢いよく成長している果樹園が、崖がはじめ一部崩れて今のような状態を形成してから多くの歳月が過ぎたことを物語っている。そこにはあの有名なワイト島の同じような景色にも勝るとも劣らない驚くほど美しい風景があった。ライムの真価を知るためにはそういう土地を何度も訪れなければならない。(11章)

Jane Austenがもっとも興味をひかれたのはSamuel Richardsonであったと言われている。事実、*Pride and Prejudice*のヒーロー、ダーシー氏の先祖伝来の屋敷(カントリーハウス)、ペンバリーは、Richardsonの小説*Sir Charles Grandison*の背景となっているグランディソンホールと多くの共通点がある。ペンバリーを訪れる際のエリザベス・ベネットの心理状態と、そのペンバリーの描写を引用してみよう。

ELIZABETH, as they drove along, watched for the first appearance of Pemberley Woods with some perturbation; and when at length they turned in at the lodge, her spirits were in a high flutter.

The park was very large, and contained great variety of ground. They entered it in one of its lowest points, and drove for some time through a beautiful wood, stretching over a wide extent.

Elizabeth's mind was too full for conversation; but she saw and admired every remarkable spot and point of view. They gradually ascended for half a mile, and then found themselves at the top of a considerable eminence, where the wood ceased, and the eye was instantly caught by Pemberley House, situated on the opposite side of a valley, into which the road with some abruptness wound. It was a large, handsome, stone building, standing well on rising ground, and backed by a ridge of high woody hills;—and in front, a stream of some natural importance was swelled into greater, but without any artificial appearance. Its banks were neither formal, nor falsely adorned. Elizabeth was delighted. She had never seen a place for which nature had done more, or where natural beauty had been so little counteracted by an awkward taste. They were all of them warm in their admiration; and at that moment she felt, that to be mistress of Pemberley might be

something!

They descended the hill, crossed the bridge, and drove to the door; and, while examining the nearer aspect of the house, all her apprehensions of meeting its owner returned. She dreaded lest the chambermaid had been mistaken. On applying to see the place, they were admitted into the hall; and Elizabeth, as they waited for the housekeeper, had leisure to wonder at her being where she was.

The housekeeper came; a respectable-looking, elderly woman, much less fine, and more civil, than she had any notion of finding her. They followed her into the dining-parlour. It was a large, well-proportioned room, handsomely fitted up. Elizabeth, after slightly surveying it, went to a window to enjoy its prospect. The hill, crowned with wood, from which they had descended, receiving increased abruptness from the distance, was a beautiful object. Every disposition of the ground was good; and she looked on the whole scene, the river, the trees scattered on its banks, and the winding of the valley, as far as she could trace it, with delight. As they passed into other rooms, these objects were taking different positions; but from every window there were beauties to be seen. The rooms were lofty and handsome, and their furniture suitable to the fortune of their proprietor; but Elizabeth saw, with admiration of his taste, that it was neither gaudy nor

uselessly fine; with less of splendor, and more real elegance, than the furniture of Rosings.

“And of this place,” thought she, “I might have been mistress! With these rooms I might now have been familiarly acquainted! (Vol III, Chapt. I)

少し長すぎて恐縮だが富田彬氏の訳があるのでこの部分の日本語訳を引用しておく。

エリザベスは、馬車の中からペンバリーの森をはじめ見やった時には、少し胸さわぎを感じたが、馬車がとうとう屋敷の方へ道を曲ると、彼女の胸はもう早鐘を打つようだった。荘園 (the Park) は大そう大きく、そして変化に富んだ地形を擁していた。馬車はいちばん低い地点の一つから入って行き、しばらくはその辺一帯をおおっている美しい森の間を抜けて走った。エリザベスは胸がいっぱいになって話も出来なかったので、ただきわだって美しい場所や見晴しのいい地点を見たり感心したりするばかりだった。およそ半マイルだらだら坂を上りつめると、やがてかなり高い丘の頂きに出たが、森はもうつきて、谷の向うに建っているペンバリー邸が、たちまち眼にはいった。そして道は、その谷の方へかなり急な勾配で下りて行っていた。大きな美しい石造りの建物で、高い地面の上に形よく建てられ、樹木のうっそうと茂った高い丘を背負っていた。建物の前のところで、自然の威容をそなえた一筋の流れがぐっと大きくひろがっていたが、すこしも人工を加えたあとが見えなかった。兩岸は形式的でもなく、わるく装飾をほどこされていかなかった。エリザベスは喜んだ。彼女は今までにこれほど自然が生かされ、これほど自然の美が下手な趣味でこわされていない場所

を見たことがなかった。3人とも熱心にほめた。その瞬間、彼女は、ペンバリーの主婦 (mistress) になるのもまんざらではないという気がした。

彼等の馬車は丘を下り、橋を渡って、戸口に乗りつけた。そして建物をすぐ眼の先に見ていると、彼女はまたもや、この家の主人 (ダーシー氏) に会いはしまいかという不安におそわれた。宿屋の女中は思いがいをしていたのではなからうかと、心配になってきた。彼らが見物させてほしいと頼むと、玄関の間へ通された。そして家政婦の来るのを待つ間に、エリザベスはこんなところへ来ている自分を不思議に思ってみたりした。

家政婦が来た。上品な年輩の婦人で、彼女が思っていたよりもずっときれいでなかったけれど、思いのほか丁寧であった。彼らは家政婦のあとについて食堂に入った。大きなつり合いの取れた部屋で、きれいに設備されていた。エリザベスは、部屋にざっと眼を通してから、眺望を楽しもうと思って窓際へ行った。さっき下りて来た森をいただいた丘は、遠くから眺めると険しさが加わって、美しい眺めだった。土地の配置のぐあいは、どこもかしこも申し分がなかった。彼女は全景を、川を、兩岸に散在する木立を、それから谷のうねりを、眼のとどく限り見て楽しんだ。別の部屋へ入るごとに、景色の風情はかわったけれど、どの窓から見ても、良い眺めであった。どの部屋も天井が高くて美しかった。そして持主の財産にふさわしい家具がはいっていた。けれどもエリザベスは彼 (ダーシー) の趣味に感心しながら、いやにけばけばしくもなく、いたずらに立派でもない家具を見た。ロージングズの家具よりは華美ではないけれど、本当の上品さがあった。

「この家の」と、彼女は考えた。「私は主

婦になっていたかもしれないんだわ！今ごろはこの部屋部屋とすっかりおなじみになっていたかもしれないんだわ。」

*Pride and Prejudice*を執筆していた当時のAustenが理想としていたカントリーハウスの景観が細かく具体的に描かれている。‘and of this place, I might have been mistress’という部分にはエリザベスの複雑な想いがこもっている。ペンバリーパークの美しさが空しく皮肉に思われて来る。屋敷も地所全体も主人ダーシー氏の留守の間でさえ、その美点をもの語っている。(エリザベスは小作家や召使いたちが、ダーシー氏を‘the best landlord and the best master’と言うのを耳にする)。巡回図書館から新刊図書を借りて読み、共感したり胸を躍らせたりしていたエリザベスは、月並みな中流紳士の次女としての生活から、ペンバリーの大地主の夫人としての優美な生活に移しかえられた自分をちょっとした間想像する。大きく美しいカントリーハウスの扉が一瞬中流の娘の憧れへと開かれる。この一種のシンデレラ物語は後に実現することになるが、このエリザベスよりはるかに社会的身分の低い女性家庭教師、ジェイン・エアがソーンフィールドホール（実はあとで火事で焼け落ちる）の所有者ロチェスター氏と結婚し、「読者よ、私は彼と結婚したのです。」と誇らしげに告げる同名の小説*Jane Eyre*の出版も、この*Pride and Prejudice*より30年ほど後である。

*Northanger Abbey*の書かれた時代、1790年代は、イギリス近代史のなかでも最も抑圧的な時代であり、フランス革命の影響も無視出来ない。(事実、Austenの従姉の夫はギロチンにかけられた。) 社会の変動の波に対して、Austenはまったく平静であったようで、彼女の作品には政治的な事柄への言及は殆ど無い。*Northanger Abbey*はむしろ例外的に、しか

も一種のジョークとして(第三巻の14章で)暴動の場面に言及している。ゴシック小説のパロディーとしての*Northanger Abbey*にはゴシック小説に夢中になったあまり、小説のなかの事件と、現実とを混同してしまい、見分けのつかなくなる若いヒロインが登場する。この純情なヒロインのゴシック小説熱をたしなめ、現実眼を開かせるのがヒーローのヘンリー・ティルニーである。しかしこのゴシック小説は当時のジャコビン革命の恐怖のひとつのあらわれであり、イギリスのカントリーハウス階級の安定性への脅威の警告であるとも考えられる。専制と迷信とはゴシック小説の2大悪弊で*The Castle of Otranto* (1764)に端を発すると言われている。ヘンリー・ティルニーがキャサリンをゴシック小説的空想から徐々に引き離して現実に眼をむけさせる説明は次のようなものである。

... Remember that we are English, that we are Christians. Consult your own understanding, your own sense of the probable, your own observations of what is passing around you-Does our education prepare us for such atrocities? Do our laws connive at them? Could they be perpetrated without being known, in a country like this, where social and literary intercourse is on such a footing... where roads and newspapers lay every thing open? (Vol III, Chapt.9)

しかし実際は父親のティルニー將軍によって家庭内での専制行為という「悪行」がキャサリンに行使される。殊にキャサリンが期待していたほどの財産家の娘でないことがわかった時、供もつけずにノーサンガーアベイを追い出し、その結果、キャサリンはたったひと

りで乗合い馬車で家までの旅を続けるはめになる。読者は危険を感じてはらはらさせられる。ティルニー將軍は金銭だけを価値の尺度とする貴族のタイプであり、好みに熱中のあまり古くからの道徳を軽んずるようになってしまっている。ノーサンガーアベイは種々な観点から描写されている。キャサリンの観点、ティルニー將軍のそれ、ヘンリー・ティルニーのそれ、そしてこれらの眺めが物語の進展につれて変化して行く。古い形式の簡素さ、社会的な実利性を示し、歓待の場ともなり、また一方ではティルニー將軍の奢侈と趣味と虚栄心の展示物ともなり、専制主義のシンボルでもある。そのような専制主義はわがま、な父親の専横にすぎないし、ヘンリー（上流階級）とキャサリン（中流階級）との結婚という形でカントリーハウスは復興させられるかもしれないという徴候もある。

ノーサンガーで読者がはじめて目にするものはジョージ王朝時代後期の理想的なカントリーハウスで、あらゆる近代的な楽しみと趣味とを兼ね備えた絵のように美しいゴシック風建築物である。それ故ノーサンガーアベイは古いイギリスの伝統の保存と近代的な進歩との両方を絵画的に表現している。

[Catherine] was struck... beyond her expectation by the grandeur of the Abbey, as she saw it for the first time from the lawn. The whole building enclosed a large court; and two sides of the quadrangle, rich in Gothic ornaments, stood forward for admiration. The remainder was shut off by knolls of old trees, or luxuriant plantations, and the steep woody hills rising behind to give it shelter, were beautiful even in the leafless month of March. (Vol II, Chapt. 7)

The windows, to which she looked with peculiar dependence, from having heard the General talk of his preserving them in their Gothic form with reverential care, were yet less what her fancy had portrayed. To be sure, the pointed arch was preserved—the form of them was Gothic—they might be even casements—but every pane was so large, so clear, so light!... The General, perceiving how her eye was employed, began to talk of the smallness of the room and simplicity of the furniture, where every thing being for daily use, pretended only to comfort (Vol II, Chapt. 5)

この'Knolls of old trees'はもちろんquercusの古木で、アベイを自然に見せ、嵐から建物を守り、美と実用性を一体化している。ゴシック的装飾の保存ということによって古い伝統の継続に対する畏敬の念が表わされている。

ノーサンガーではゴシック（過去）と進歩的現代との融合が窓というものに表わされている。つまり形は伝統的（古い）だが非常に透き通って明るいのである。つまり文明開化がガラスの選択によってまで示され、板ガラスの大きさがイギリス工業技術の発達を物語っている。また、ぜいたくと趣味が家具の豊かさや優美さに表われている。しかし、あまりぜいたく過ぎて見えないように、ティルニー將軍は、にわかには道徳的意見をさしはさむのである。他のAusten小説のヒーローたちの牧師館の中に優雅な楽しみと実用性との融合のあるべき姿を読者は数多く見出すことが出来るのである。しかしティルニー將軍の口にかゝると、ただの歌い文句になってしまっている。うぬぼれて、月並みな言葉で自慢を続

けている。

... that there were some apartments in the Abbey not unworthy her notice — and was proceeding to mention the costly gilding of one in particular, when taking out his watch, he stopped short to pronounce it with surprise within twenty minutes of five! This seemed the word of separation, and Catherine found herself hurried away by Miss Tilney in such a manner as convinced her that the strictest punctuality to the family hours would be expected at Northanger.

ティルニー將軍の部屋自慢は単なるうぬぼれではない。彼はキャサリンに自分の虚栄心の自信をつけてもらいたいと望んでいる。ばかばかしく形式ばった食事は不誠実なもてなしのしるしであり、キャサリンは大食堂の豪華さや召使いの数の多さに圧倒される。ティルニー家の形ばかりの礼儀は読者にも明らかである。ティルニー將軍は旧体制の儀式ばった生活を送り、召使いの行列、豪華な馬車、形式ばった食事、規律ある行動を誇っている。しかし彼の子供たちは、出来れば、もっと新しい時代のくつろいだ民主的な簡略さを望んでいる。これでは真の家族とは言えない。父権制社会の支配権行使に明け暮れている。愛情不足の最も重大な徴しは妻の肖像画をティルニー將軍が拒否したことである。彼の趣味の規準に合わないというのだ。自分勝手な好みの規則が真の敬愛の情にとって代わっている。

そのあと將軍はキャサリンに庭園を見せてまわる。將軍はキャサリンに温室についてたずねる。

‘How were Mr. Allen’s

succession-houses worked?’ describing the nature of his own as they entered them.

‘Mr. Allen had only one small hot-house, which Mrs. Allen had the use of for her plants in winter, and there was a fire in it now and then.’

‘He is a happy man!’ said the General, with a look of very happy contempt. (Vol II, Chapt. 7)

蛇足であるが、succession-houseというのは温度調節された促成栽培用温室で、当時としては非常にぜいたくなものであったらしい。

領地での幸せな暮らしむきのひとつに、地主と小作人が互いに相手の利益になるように心を砕くということがあった。ティルニー將軍は彼なりの自己満足的方法であるが、そのこともよくわかっている。

It is a rule with me, Miss Morland, never to give offence to any of my neighbours, if a small sacrifice of time and attention can prevent it. They are a set of very worthy man. They have half a buck from Northanger twice a year; and I dine with them whenever I can.

(Vol II, Chapt. 11)

これではあまりに儀式ばった関係で、権力で恩を押しつけているに過ぎない。かなり痛烈な皮肉である。ノーサンガーアベイは、もと、尼僧院であったのだが、ティルニー家の先祖に買い上げられ、当時流行の囲い込みと取り壊して拡大されつゝあった。將軍は自分でキャサリンに、政治の小冊子を書いていると告げ、他の人々のためだと言うが実は自分の資産を守るためであることは見当がつく。

ティルニー領地民たちはアベイのぜいたくな改造のために雇われてふところ工合がよくなるのも結構なことである。温室村というアイディアはばかっているが、ティルニー家の人々が消費出来るよりはるかに多くの食物を供給するに違いない。また巨大な台所を將軍は例によって自慢しているが、まるで教区民全体の食事を賄うかのようである。こうしたことは囲い込み政策の結果のひとつである。Austenはこのあたりで大そう両面価値的な(あいまいな)言葉遣いをして居り、この世の善と悪が互いに混じり合いながら発展していく。小説は皮肉よりいっそう巧妙な形で自明の理を暴露している。Austenはティルニー將軍の誇と牧歌的光景とを並列しているわけではない。キャサリンはひどく感心するが、気が散ってしまう。たとえノーサンガーがゴシック小説の恐怖と迫害の空想的建物でないにしても、キャサリンの世界でもない。彼女はウッドストンのなつかしの牧師館の方がずっと好きなのである。ノーサンガーのゴシックハウスつまりアベイの復興は次の世代、すなわちヘンリー、(妹の)エリナー、とヘンリーのキャサリンとの結婚を経てはじめてなすとげられる。ティルニー家の子供たちの善意には疑いの余地がない。間違っているのは彼らの社会的階級でもなく、將軍その人なのである。結局キャサリンの望みはヘンリー・ティルニーとの結婚であるから、カントリーハウス階級への出世ということになる。こういう点でキャサリンは典型的な女性愛好小説のヒロインなのである。ティルニー家とその資産は豪華に繁栄しつづけることになる。ゴシック小説的な非道行為に似たものがいくらかあったにしても、ウッドストン出身の善意ある女性(キャサリン)によって、その家は實質的に、より良く健康的に発展していくことは疑いない。

秩序の維持と一新というテーマは Jane

Austenがその小説においてくりかえし扱っているテーマである。*Northanger Abbey*のティルニー將軍が自分の後継者に感じたのと同じように、*Pride and Prejudice*のレイディー・キャサリン・ド・バラはペンバリーの陰影がエリザベス・ベネットの活発な精神に「汚染」されるのではないかと心配する。また*Persuasion*のウォルター・エリオット卿はケリンチ・ホルの鏡の前で虚栄心いっぱいポーズをとっているうちに、クロフト提督という実行力ある人物に取って代られてしまう。キャサリン・モーランドはAusten小説のヒロインのうちで小説と事実との複雑な関係を理解するための「学習」によって、道徳や社会の真実に徐々に眼を開いて行く第一番目のヒロインである。*Mansfield Park*のヒロイン、ファニー・プライスは「善良な女性」であり、物騒な世の中の一つの憩いの場所のような存在となる。彼女の道徳性は、古き良き物の美に対する、控え目な愛情の結果である。その当を得た行動は、感受性と正しい信条との産物である。こうして存立も危うかったマンスフィールドパークの家屋敷は、長い受難のあと、善良な女性の愛情によって守られるのである。

*Mansfield Park*はJane Austenの代表的なカントリーハウス小説で、計画的に配列された感を深くする。この小説は*Northanger Abbey*におけるように、善性の資産と悪性の資産という基本的には二元性の対立の上に構成されている。この小説には理想化された領域もないし、社会や時代から隔絶された古風な家や景色の想像もわりこむ余地が残されていない。たゞ観点だけが清らか(汚れない)である。読者はファニーの、古さを懐かしむ愛情深い眼を通して物を見るからである。しかし、この古さを懐かしむ(保守的)なものの見方は、本来、時間的關係でつまり現在のものが過去のものを解明し、未来にむかって

前進して行くといった方法で捉えられる。その前進運動は必要ではあるが、過去のものに対する尊敬の念を伴う。ノーサンガーにおけると同様、旧体制は根は頹廢的なものである。

マライア・バートラムの未来の婚家、サザトンへの訪問に、読者は古い価値（評価の仕方）が衰退しているのを見る。マライア・バートラムは、メアリー、クローフォードに好印象を与えようと次のように話しかける。

Here begins the village. Those cottages are really a disgrace. The church spire is reckoned remarkably handsome. I am glad the church is not so close to the Great House as often happens in old places. The annoyance of the bells must be terrible. There is the parsonage; a tidy looking house, and I understand the clergyman and his wife are very decent people. Those are alms-houses, built by some of the family. To the right is the steward's house; he is a very respectable man. Now we are coming to the lodge gates; but we have nearly a mile through the park still (Vol I, Chapt. 8)

こゝにカントリーハウス社会のあるべき姿があつて、教会、家族の墓地、私施救貧院、勤勉な牧師、家令などが大家の保護のもとに集まっていた。経済的実用性と慈悲と道徳性のつながりである。しかし、マライアの態度は焦点がぼけている。礼拝堂と家屋との間の距離の意味づけは道徳的だが、マライアは単に便利さという点からだけ見ている。礼拝堂はただ立派であるという目的のためだけに建てられるのではない。牧師や家令はただ品行方正という点からのみ判断されるものでも

ない。小家屋に体面を汚されるというのもおかしい。もしそうならそれらは(当時流行の)庭園改造の第一番の目標になるはずである。

サザトンそのものは今では単に人に見せるだけのカントリーハウスである。ラッシュワース夫人(マライアの未来の義母)はナショナルトラストのガイドのように、形式ばって説明しはじめる。

The whole party... under Mrs Rushworth's guidance were shewn through a number of rooms, all lofty, and many large, and amply furnished in the taste of fifty years back, with shining floors, solid mahogany, rich damask, marble gilding and carving, each handsome in its way. Of pictures there were abundance, and some few good, but the larger part were family portraits, no longer any thing to any body but Mrs Rushworth, who had been at great pains to learn all that the housekeeper could teach, and was now almost equally well qualified to shew the house.

古い形の礼儀正しさが家の女主人によって守られて来ていたのだ。しかしそれは空しい形式的儀礼である。訪問者たちの多くにとって何の意味ももたない。ラッシュワース夫人はたゞ部屋を案内して廻るために家政婦から自分の家族の歴史を習わなくてはならなかった。この家のあと継ぎである息子はそれについて何も知らない。マライアの心はサザトンを所有する(女主人となる)ことにだけ集中している。メアリー・クローフォードは何十軒ものカントリーハウスを見て来ていたので、何も気につけない。しかしラッシュワース夫人にはひとりだけ喜んで耳を傾ける人がいた。

ファニー・プライスである。ファニーは過去というものの実感に熱中する。この道徳的意味合いが礼拝堂への訪問で明らかになる。

... They entered. Fanny's imagination had prepared her for something grander than a mere, spacious, oblong room, fitted up for the purpose of devotion—with nothing more striking or more solemn than the profusion of mahogany, and the crimson velvet cushions appearing over the ledge of the family gallery above. 'I am disappointed,' said she, in a low voice, to Edmund. 'This is not my idea of a chapel. There is nothing awful here, nothing melancholy, nothing grand. Here are no aisles, no arches, no inscriptions, no banners. No banners, cousin, to be "blown by the night wind of Heaven." No signs that a "Scottish monarch sleeps below"...

Mrs Rushworth began her relation. 'This chapel was fitted up as you see it, in James the Second's time. Before that period, as I understand, the pews were only wainscot; and there is some reason to think that the linings and cushions of the pulpit and family-seat were only purple cloth; but this is not quite certain. It is a handsome chapel, and was formerly in constant use both morning and evening. Prayers were always read in it by the domestic chaplain, within the memory of many. But the late Mr Rushworth left it off.'

'Every generation has its improvements,' said Miss Crawford,

with a smile, to Edmund.

文学愛好によって培われたファニーの想像力はラッシュワース夫人の腰板や紫色の布についての古物愛好的説明の方がはるかに好ましいのである。'It is a handsome chapel'. という説明にはどこかティルニー将軍の誇と自己満足を思い出す。またクローフォード嬢の'Every generation has its improvements.' という言葉にはあらゆる道徳的価値の喪失への願望が含まれている。クローフォード兄妹はいわば「根無し草」的な人間でカントリーハウスの庭園を次々と改造して廻っている。兄のヘンリーは自分の領地に居住しない。妹のメアリーは労働者の必要物について何も知らない。(ハーブの運搬の一件はその良い例である。) 兩人とも家や景色をただ「庭園改造業」のための表現手段として見ている。彼らにとっては趣味とお金のぜいたくな運用であり、古い家屋を建築的に新しく改造したり、荘園を改装するために老木を切り倒したりすることだが、とくにこの小説においては、ラッシュワース家の人々を手伝って、サザトンパークを「陰気な古い牢獄」からピカピカの新しいステイタスシンボルに造り替えることである。道徳性の欠けたぜいたくさへの憧れが感じられる。メアリーが家族揃っての礼拝の中止について話し、進歩だと論ずるのも当時としては非難に値いする。このサザトン訪問という出来事はこの小説では非常に形式尊重的に扱われているので、この個所では比喩的な感じさえる。ひとつひとつの話しや身振りが道徳的意味合いを帯びている。

マンスフィールドパークは物語の本筋をなす事件が起る場所としては、もっと複雑な位置が必要だと考えられる(サザトンにはあったのに) マンスフィールドの建物内を見て廻るということもない。恐らくマンスフィールドパーク自体が、登場人物たちが住むための

もので、詮索されるためのものではないという設定なのであろう。読者はたゞメアリー・クロフォードから、このカントリーハウスが広々としていて、近代的で周囲が5マイルある荘園の中に建っているということを知るだけである。バートラム家の人々は時々近所の人々を招いて小ぢんまりとしたうちとけたパーティーを開く、しかしあまりにうちとけ過ぎるのも良くない。俗っぽいいイツ氏の到着で、物事が少しおかしくなりはじめる。広大な荘園はサザトンとも同じように無秩序の方向へと動きはじめる。これに反して（すぐ近くの）牧師館は意味深長な焦点をなす。後にエドモンドが聖職者となりファニーが結婚してそこに住むようになる時、パークと牧師館との間の付き合いは道徳的な意義を増して来るようになる。

マンズフィールドがサザトンより良いと示唆するものが特にあるわけではない。もしあるとすればマナーの堅苦しさであろうか。サー・トーマスはティルニー将軍の属性を多く持っている。サートーマスが居合せると家族の者たちは恐怖と緊張できごちなくなってしまう。これはサートーマスの子供の教育における欠点の原因で、(怠惰で無気力な母親も同様だが) 子供との関係に親密さが欠けていて、そのため彼は物事の表面を真実と取り違えてしまう。家はその持主の鏡である。ファニーがポーツマスの陋屋からはじめてマンズフィールドパークに到着した時、'the grandeur of the house astonished her.'という個所を思い起こしてみよう。部屋はあまり大きすぎて、入って行くにもおっかなびっくりなのであった。そして後に、ファニーがマンズフィールドにすっかり馴れて、大好きな我が家と感ずるようになった時でも、家族がトランプにうち興ずる時でも、サー・トーマスが不在の時にはみんな晴れやかにくつろいでいるのに、彼が同席している時は'steady sobriety

and orderly silence prevail'なのである。家長の面前では気楽さが消え去るというわけだ。支配体制は歴然たるものである。しかしその体制もゆがんだものである。サー・トーマスは社会的地位、財産、権勢に目がくらんで、マライア・バートラムとラッシュワース氏との縁組、そして後にはファニーとヘンリーとの縁組の欠陥に気がつかない。ラッシュワース氏についてサー・トーマスは「同じ州に住んでいるし、利害関係も似かよっているのだから、全く丁度よい縁組みだ。」と思う。そして心から賛成する。もっとも、「もしこの男に年取12000ポンドがなかったら、ひどくとんまな男だろう。」とひそかに思いはしたが。しかし、もっとひどい誤りは自分の娘(マライア)の道徳的信念の欠如に全く気がつかなかったことである。

野心、高慢、冷淡さ、儀礼偏重といった属性を持つ所有者がいれば、マンズフィールドは皮肉の恰好の目標に見えてくるであろう。ファニー・プライスとその理性的な信念と道徳性を以て愛し、尊重するようなカントリーハウスにはなりそうもない。とは言っても、マンズフィールドの賛辞は、あの革命の時代(フランス革命にまきこまれたAustenの義理の従兄がギロチンにかけられたことは前にも述べた)に書かれた、カントリーハウスのための有力な弁明となるであろう。物事の秩序というものには方向さえ間違わなければ価値があるものだから。マンズフィールドはその主、サー・トーマスがいないければ(いろいろ欠点があるにしても)崩壊してしまうであろうし、それとともに道徳的信念もすべて消滅することになる。クロフォード兄妹を仲間入りさせれば、その「庭園改造」の趣味とともに割り込んで来た兄妹に、古き良きマンズフィールドのしきたりは全く打破され、代りに残るものは何もない。サー・トーマスの書齋が素人芝居の劇場に危なく造りかえられそうに

なった時、(書斎の本に込められていた)文化や道徳の信念そのものが、価値にも道徳にも無知な卑俗(な人間)行為によって打ち砕かれそうになっていた。イエイツ氏は(芝居口調でしゃべっているところをサー・トーマスにみつかってしまうのだが)破壊的な扇動政治家の一種のパロディーである。サー・トーマスが海外の領地の処理を終えて帰宅した後の最初の仕事は、バートラム家の必要な秩序と儀礼を取りもどし、各種の改装を運び去らせ、事物をもとのしかるべき用途にもどすことであった。

He had to reinstate himself in all the wanted concerns of his Mansfield life, to see his steward and his bailiff—to examine and compute and, in the intervals of business, to walk into his stables and his gardens, and nearest plantations; but active and methodical, he had not only done all this before he resumed his seat as master of the house at dinner, he had also set the carpenter to work in pulling down what had been so lately put up in the billiard room, and given the scene painter his dismissal.

(Vol II, Chapt. 2)

家の中心的行事は共同の食事である。テーブルの最上席にマスターのサー・トーマス(長い不在のあとで海外から帰国したのだから、以前より温厚で愛情あふれた様子で)が座って居り、その下座には家族全員が居流れ、さらに召使いまで階層制度に従って整然と着席している。サー・トーマスの帰宅は、(欠点だらけの家長ではあっても)まるで嵐にもてあそばされる船の船橋に到着した船長のようである。舵手がしっかりと舵輪を握り、船(マン

スフィールド丸)は再び舵効速力にもどる

ファニーが好きになったのはこの秩序の感覚である。家の中のファニーの居場所は文字通りにも比喩的にもファニーの部屋である。はじめのうちは暖炉に火も入れられなかったが、それでも彼女にとっては安全な領域であり、やがてその安全に、適正な気づかいが快適さをそえてくれる。大きなカントリーハウスには多くの部屋があり、その部屋部屋には役割りと居住者が定まっている。ファニーの部屋は個室というには程遠いが、彼女のセンチメンタルな感情のミュージアムであり、その存在の継続とマンズフィールドにおける彼女の幸福を物語る思い出の宝物の宝庫である。その部屋は教室としても使われた。正しい道徳の教育の必要性がこの小説の主なテーマであるから。またファニーにとってはその部屋は書斎でもある。本の正しい選択は教育の必要な部分であるから。彼女自身のこの部屋はまた、外部の圧力があまり大きくなる時にファニーが逃げ込んでいられる安全な避難所でもある。エドモンドからでも、メアリーからでも、ファニーがその部屋へ逃げ込む時はいつでも、ファニーの生涯の重大な瞬間となる。

表面上の秩序は、礼儀でさえ心の(奥の)自由の保護手段となる。これはハウス全体の福祉のような大きな事柄についても、またファニーの生活のような小さな事柄についても事実である。一つ例を挙げてみよう。ある時ファニーはヘンリー・クローフォードの求愛に悩まされ、どちらへ逃げればいいのか途方にくれた時、執事がやって来て、そこへ召使いの行列がお茶を(ヘンリーに)出しに行列して来たおかげで、助かるという場面、

The solemn procession, headed by Baddely, of tea-board, urn, and cage-bearers, made its appearance, and delivered her from a grievous impris-

onment of body and mind. Mr Crawford was obliged to move. She was at liberty, she was busy, she was protected. (Vol III, Chapt. 3)

これは皮肉である。‘solemn procession’という句は茶化した表現で、サー・トーマス流の重々しいおごそかさの最悪のものである。しかし擬人化されてもいる。執事の出現に読者はほっと胸をなでおろす。カントリーハウスのシステムの存在そのものがファニーを自由にしてくれるのである。もしそうでなかったらファニーはあの略奪性の女性狂い（少し大げさだが）のヘンリー・クロウフォードから逃げられなかったことだろう。

ファニーにマンズフィールドの重要性を知らせるために、彼女をポーツマスの実家に帰したサー・トーマスの判断は正しい。その居住者に適当な場所と空間を提供出来るのは大きな（カントリー）ハウスだけであるから。（その政略的な意図は明らかである。）ポーツマスでの経験からファニーは、マンズフィールドの家長が与えているものが何であるかを頭でも心でもわかり、サー・トーマスに自分の真の父親としての感情を抱くようになる。マンズフィールドでは反感を持って眺めていた儀礼、堅苦しき、階級制度式豪華さ、が今ではポーツマスの貧乏世帯の騒々しきや下品さのために、恋しく感じられてくる。ファニーはマンズフィールドの時と季節とをなつかしがる。

... She could think of nothing but Mansfield, its beloved inmates, its happy ways. Every thing where she now was was in full contrast to it. The elegance, propriety, regularity, harmony—and perhaps, above all, the peace and tranquillity of Mansfield,

were brought to her remembrance every hour of the day, by the prevalence of every thing opposite to them here. (Vol III, Chapt. 8)

普通の比較だったら良い家とその反対のものとの比較をくり返し主張するが、それは結局はマンズフィールド対サザトンである。サザトンは適当な主人（と女主人）がいれば、もう一つのマンズフィールドになる可能性がある。それはカントリーハウスそのものなのである。ポーツマスの家の粗野で月並で無教養な生活と対立している、一つのカントリーハウスの典型としてのマンズフィールドである。サー・トーマスを最も不気嫌な時でさえ、ファニーの生みの父親と比較してみれば、どちらに彼女の気持が傾いていくかすぐわかることだ。サー・トーマスはファニーがマンズフィールド・パークの優雅さとぜいたくな生活を恋しがると考えていた。ファニーの望んだものはマンズフィールドの美しい外観ではなく、それが自分の愛する人々の世界に所属しているからである。ファニーが必要とする（平和とおだやかさの伴う）「調和」というのは、バートラム夫人の無気力のけだるい静けさではない。マンズフィールドにおけるファニーの役目は救いの天使の役割に近いものになるであろう。「ハーモニー」は古いものを尊重するイメージのひとつである。マンズフィールドを追い出されて、今ではたゞ感受性豊かな想像力によって記憶に頼る生活の中で、ファニーは、遠くポーツマスに在っても自分の理想とするカントリーハウスに、自分が保ち続けることが出来るものを探り求めている。こうしてファニーは妹のスーザンに、道徳的感受性とマンズフィールドの伝統による趣味とを教え込みはじめる。このファニーからスーザンへの伝統の引き継ぎは、ヒロイン、ファニーがマンズフィールドの女主人に出世す

ることよりも、いっそう重要な事柄である。この真面目な福音主義的な小説にはもう一つ異ったテーマが感じ取れる。それはヒロインよりもカントリーハウスそのものについてのテーマである。ファニーがマンズフィールドの最高の価値を感じるのは、彼女が、いわば、部外者（バートラム家の生まれでない）であるからであろう。ファニーは秩序を愛し重んじるが、その秩序を行使する側には所属していない。彼女の役割はこういったものの価値を、より広い世界へと広めて行くことである。彼女の責任、神聖な役割ととってもよからう。スーザンの教育も、また、この小説 *Mansfield Park* の存在理由もこゝに由来すると言える。

ファニーにふさわしい家はエドマンズのソートンで、人格高潔な由緒正しいカントリーハウスの家族が何代も住み続けて来たと思われる、がっしりした、部屋数の多い家である。この描写はヘンリー・クローフォードのものであるが全くその通りである。エドマンズの唯一の重大な変化は、パーク内のあき地を家屋から少し遠くへ移すことである。そうしなければ、自分とファニーのための家の選択が、父の家を小さく造り替えなければならないことになるからだ。最終的にはファニーとエドマンズはマンズフィールドパークから見える位置にあり、その庇護を受ける牧師館に移り住む。彼らは決して家屋敷を所有することはない。彼らは門のところでそのカントリーハウスを見守っている守護神的な存在となる。

Henry James (1843~1916) が *The Great Good Place* と呼んだカントリーハウスは、イギリス独特な芸術の形態であり、今日なお休暇には、カントリーハウス巡りの人々があとを絶たない。

Jane Austen はその小説の背景として、カントリーハウスを使っている。しかし背景は背景に過ぎない。重要なのは、その内外で演

じられる人間ドラマであることは言うまでもない。

〈参考文献〉

小説からの引用は全部

The Oxford Illustrated Jane Austen

Edited by R. W. Chapman, (London, Oxford University Press, 1987) からである。

Bush, Douglas, *Jane Austen*

(New York, Macmillan 1975)

Llewelyn, Margaret, *Jane Austen*

William Kimber & Co. Ltd,

(London, 1977)

Hardy, John, *Jane Austen's Heroines*

Routledge & Kegan Paul,

(London, 1984)

Butler, Marilyn, *Jane Austen and*

the War of Ideas

Clarendon Press,

(Oxford, 1987)

Southam, B. C. (ed), *Jane Austen:*

The Critical Heritage Vol II

Routledge & Kegan Paul,

(London, 1987)

Kelsall, Malcolm, *The Great Good Place*

Harvester Wheatsheaf,

(London, 1993)

Drabble, Margaret, *A Writer's Britain*

奥原宇、丹羽隆子共訳

(研究社出版 1993)